

全校の皆さん、おはようございます。

五月も終わりに近づき、夏の訪れを感じる気候となりました。急な暑さに私たちは人間は体や気持ちはまだそれについて行けていないところがありますが、顔を上げて外に目を向けてみると、瑞々しく鮮やかな緑の世界が広がっています。動植物の活動も活発になり、生命の躍動する季節であることを思います。

この季節から大変になってくるのは、なんと言っても草刈りです。毎日のようにどこからともなく草刈り機の音が聞こえてきます。刈っても刈ってもまた伸びてくる雑草に手を焼きながらも、雑草の生命力の強さを感じます。

草刈り機で刈り取ってしまうような草を、私たちはまとめて「雑草」と呼んできますが、植物学者である牧野富太郎は「雑草という名の草は無い」と言いました。さらに続けて「どんな植物にもみな名前があつて、それぞれ自分の好きな場所で生を営んでいる。人間の一方的な考え方で、これを雑草と決めつけてしまうのはいいけない。」と言いました。

このような「雑草」という呼び方ひとつにも、人間がいかに自分の都合を中心にして物事を見ているかということが表れています。自分のモノサシによつて物事の本質を歪め、正しく見ることができない人間の様子を仏教では「邪見」といいます。

人間はどうしてもこの「邪見」になってしまうと仏教では教えます。たしかに、その対象が自分にとつて役に立つのかどうか、損なのか得なのか、という物の見方がクセになってしまっているように思います。自分にとつて都合の悪い草をまとめて「雑草」と呼ぶのは、まさにこの「邪見」から来ているように思います。一方で、見た目が良くて私たちを良い気分になせってくれる花を価値あるものとして値段を付けて売っているのも、自分の都合を中心にして花の命に価値をつけているということですので、その意味では同じように「邪見」による行いなのかもしれません。有名な数学者であり仏教を大切にした岡潔は、「数学を研究して何の役に立つのか」と聞く人に対して「スマイレはただスマイレのように咲けばよいのであって、そのことが春の野にどのような影響があるうとなかろうと、スマイレのあずかり知らないことだ。」と答えました。

役に立つのかどうか、損なのか得なのか、という物の見方が日常のあらゆるところに浸透してしまつて、人間を含めあらゆるものをそのように見ることが当たり前で正しいことのように思い込んでいるのが現代の私たちですが、そのような「邪見」を破っていくのが仏教の教えなのです。